

## 体育の日

体育の日、深沢地区の運動会である。十五年前、町内会の役員の順番が廻ってきた年にはカミさんと二人大わらわで参加した。分譲地に入居して間がない頃でお目見えの気分があつたし、四十八歳だつたか、年齢も若手の方だつたので運動会担当を仰せつかつて張り切つたのだと思う。入場行進の先頭を切つて役員四人で歩調を揃えて日の丸の旗を運んだ、晴れがましくも照れ臭い記憶がある。この時いくつかの本気で走る種目に出場して、いくら焦つても少しも体が前に進まないのに驚愕した。これが自分のトシを痛感するようになった最初の運動会だつたような気がする。近年は寄付金を出せばかりで参加したことはない。カミさんはまだ若いし元来大好きなイベントだからほぼ毎年出場して参加賞の手拭を稼いでいるらしい。

役員の当番は分譲地への入居順で廻つて来る。あと五年ぐらいで二回目の順番が来るが、その時はどんな具合になつているだろうか。

この町に棲み付いて二十余年、ひとり我が家のみならず住民等しく齢傾き、屈強の若手を失つて今や運動会掉尾を飾る町内会对抗リレーのメンバー選考に、どこの町内会も往生している有様だそうだ。近隣になにしる若い世代が少ない。子供の人数が年々減つて、今年は二百戸の我が分譲地の中に小中学生以下の子供が十一人しかない。数がものをいう綱引きの参加希望者も少なく、七十五歳の今期町内会長夫人自身、瘦軀を押して御出馬になられる始末と。

往時、夏休みの朝のラジオ体操が始まると、会場の小公園周辺の喧騒には辟易したものだけれど、今年あたり朝の体操をやっていたかどうか。夕方の、あの黄金の時刻にも子供たちの遊びまわる声を聞いたことがない。

昼間賑やかな目抜き通りでさえ、観光客の立ち去つたあとは宵の口から人通りが絶え、静まり返つて鎌倉はすっかり老人の町である。

十月十日、午前中は薄曇りのようだったが、陽が西に傾くにつれて晴れ上がり、二階の窓から見渡せば今や空気は澄みに澄んで樹木たちの葉の一枚一枚が一斉に金緑色に輝いている。遠近の家々も庭木も向うの山も、風景の全体が金色に輝いているこの時間がとても貴重に思われて、また書齋に座り込む気になれない。

休日が大抵そうであるように今日も一日、郵便物やら文献やら雑誌やらを整理して終わる。整理といつても読み直したりはとても出来ないので、要不要の仕分けをしているだけ

で、ひたすら分類した挙句早いか遅いかの違いだけで、結局どちらも棄てることになる。しかもこの一年はパソコン通信を始めたのでこれにも余計な時間を取られることになった。主人公が操作を誤ったという自覚が無いのにこの未熟なシステムは突然臍を曲げることがしばしばあって、肝腎の通信よりも、その仕掛けやら整備に追われていることの方が多し。あたかも性悪な女を妾にしたような具合である。もつとも妾なんて言葉は死語か、今や。

今朝も二時間ばかり泳いだだけでずっと部屋にこもっていた。昼食には、運動会場まで寄付を届けに行ったカミさんが参加報酬として頂いてきた弁当を、横流しして貰って頂戴した。午後また出ていったカミさんは飛んで火に入る夏の虫、高齢の役員諸兄弟の懇望もだしがたく綱引きのエンジンと化したらしく、まだ帰って来ない。

北の窓から見下ろすと、向かいの小林家の柿の木にカラスが群れて実をもぎ取っている。真っ黒い軀を金色に光らせたのが六羽もいる。金粉を撒いたような黄昏の光を真横から浴びてカラスは食事の支度に夢中である。半分喰い欠いた柿の実が玄関先に落ちていていることがよくあるので、カラスのやつ、枝になっっている実を突つくのかと思っていたが、そうではなくてまず実の付いている枝を啜って力まかせに捻じ切る、そうして今度は枝付きの実を啜え直して私の家の二階の屋根まで運んで来て喰っているらしい。枝付きの柿を脚で抑えておかなければコロコロ逃げてうまくいかないのである。頭上で羽音やら足音が入り乱れて騒がしい。

私の家にも柿の木があるのだけれどカラスの襲撃を免れているのは、まだ熟してないのか渋いのか。

赤い光をちつとも放たないで、黄金色のまま太陽が低い山並みに没した五時十五分、西方の空はますます青く深く澄んだまま暮れなずみ、天頂から南西に松葉の形をしていくいと伸びる二筋の飛行雲にはまだ昼間の眩しい陽光が白く光っていた。